

心のアルバム

ウイルス学者として日々、インフルエンザなどの感染症と向き合っています。研究の道に進んだ原点は、この顕微鏡。小学4年か5年のころ、たまたま応募した食品会社の懸賞で当たりました。今でも宝物です。

ワクワクしながら手にしました。薬剤師の父と一緒に身近な生物などを観察。「葉っぱをかみそりで切って見ると面

白いなどと教えられ、面白さに引き込まれていきました。中1の夏休みのことです。父のアドバイスで近所のお城のお堀から水をくんできて、観察に挑戦しました。レンズをのぞいていると、1匹のミジンコが見え、おなかから小さなミジンコがぞくぞく「出産」シーンでした。感動し、夢中で記録しました。

担任が大類先生という理科

国立病院機構仙台医療センター・
ウイルスセンター長

西村 秀一さん(54)



懸賞の顕微鏡研究の原点

の先生で、その観察記録に「金ヨウや植物にも詳しく、新種を発見した体験談などもすく

く面白かった。先生の影響で、自分も野山にチヨウを追っ

うになっていました。

中学卒業後、親元を離れて山形東高に進学し、紆余(うよ)曲折を経て医学部へ。ウイルス学の新進気鋭の先生と出会い、それがきっかけで研究の世界に入りました。

同級生の大半が臨床医になる中で、研究医となったのはやはり、顕微鏡をめぐる原体験があったからでしょう。

知識や経験をさりげなく伝えてくれた、父や大類先生の存在も大きい。2人とも「受験のため」とか「科学者に育てたい」といった意図はなかったはず。自由に興味をはぐくめたからこそ、研究への原動力を持ち続けることができたのだと思います。

にしむら・ひでかず 1955年、新庄市生まれ。山形大医学部卒。米疾病対策センター(CDC)留学。国立感染症研究所主任研究官を経て、2000年から現職。訳書に「史上最悪のインフルエンザ」など。